

# 大きな壁に挑むことを意気に感じ、 思い残すことなくぶつかって行く。



小西さんとNFL殿堂入りした元シーホークス攻撃ラインのウォルター・ジョーンズ氏

## 小西 慶三 Keizo Konishi

小西慶三(こにし・けいぞう)／ファイターズ現役時代は攻撃ライン全般。1991年に社団法人・共同通信社入社。福岡支社でスポーツ記者としてのスタートを切り、1994年の大阪支社転動後にプロ野球オリックス球団担当となる。以降、西武ライオンズ担当などを経て2001年から米国シアトル在住。新人王、最優秀監督、サイヤング(最優秀投手)、MVPの主要4賞を決める全米野球記者協会会員として2003年、日本人メディアとして最初の投票を行った。現場での年間取材試合数は毎年200超。今年3月、イチロー選手の現役引退を他社に先駆けてスクープした。

共同通信のスポーツ記者として、イチロー選手を長く取材しました。まずはオリックス球団の担当として2年間、そして彼がメジャー入りして引退するまでの19年間です。日本では数年間、他チームを任された期間もあり、その間も独自で取材を続けていたから、その数年分を併せると四半世紀を超えるでしょう。現場で目撃した彼のヒット数は4000本に届くかどうか。日米メディアのなかで、誰よりもたくさんイチロー選手のヒットを見ることができたのは幸運でした。

### お前、ホンマにそれでいいのさ

彼はいくつもの大記録を打ち立てたスーパースターです。個性的な言動もあってファンへの関心はもとより高い。記事のリクエストも当然多いし、何かとインタビュの機会も増えます。ですが、彼は自身にも厳しいのと同じくらいメディア関係者にも厳しかった。取材者が準備不足だったり、プレーへの理解度が低いと感じたとき、とたんに彼は何も話さなくなり、あるいは度々お互いを知るようになり、プライベートで食事したり、雑談をしたりするような関係になってからも、いつ

### 技術を極めるために何をなすべきか

セ・リーグ人気チームの選手が盛り場でチャホヤされたり、テレビや新聞で大きく取り上げられたりすることを「あいつらは恵まれているなあ。いいなあ」とオリックスの先輩、同僚らが羨ましがるとき、彼は逆に「あれでは野球に集中できない。良い環境とはいえない」と受け止めます。誰よりも野球がう

まくなりた、技術を究めたい。そのためには何をしなければならぬのか。それを常に考え、実践していく姿勢は、以前から他と一線を画していました。

イチロー選手は毎朝自宅でカレーを食べる。NHKのドキュメント番組でそんなエピソードが紹介され、今でもよく知り合いから「あの話は本当なの？」と聞かれます。実際のところは「カレーを食べていた時期はなかったが、ずっとカレーだったわけではない」とでしようか。要は、いったんパターンができるとその継続期間がとても長い。それは毎朝の食事に限らず、彼の日常すべてに当てはまりました。自ら習慣を定め、その通りに日々を過ごすことで心身が安定するといいます。いくつものルーティーンを重ねることによって、ちょっとした体調の変化にも敏感になり、体を正確にイメージ通り動かすことにつながると思えるそうです。

遠征先で立ち寄るレストランはほぼ決まっています。オーダーするメニューも毎回同じでした。球場入りからの準備やトレーニングも基本的に同じ。毎日同じ時間に同じルーティーンをこなしていくイチロー選手を時計がわりにしていた。そんなことを元チームメイトから聞いたことがあります。イチロー選手自身が「時計は電池が切れたら止まる。でも僕に電池切れはない」と半ば本気、半ば冗談で話したこともありました。決めごとを根気強く続ける。自分にも他人にも妥協しない。そんなストイックな彼に、何とか現役引退までついていくことができたのは、ひとえにファイターズでの4年間があったからだと思います。

### 結果を残すことの大変さを知る

まず大きかったのは勝つこと、結果を残す



2004年、メジャーリーグ年間最多安打記録を更新したシーズン後、イチロー選手自宅でのインタビュー

ことがどれだけ大変かを身をもって知ったことでしょう。自分ではベストを尽くしたと思っても、相手の努力がそれを上回ってれば勝負にさえならない。たまたまこちらの準備がうまくいったとしても、ちょっとした運に左右されて勝てないこともあります。個人的には「やれることを全てやって、そのときを待つ」という境地にはなかなか到達できなかったですが、ファイターズでの4年間ではいくつもその具体例を見てきたつもりです。これだけやればあの強い立命に勝てる。そんな練習は現実にはありません。自分たちが現役の際は京大や日大が大きな壁でしたが、彼らを超えるための絶対的な対策もあり

ませんでした。それでも皆で最善策を求めて試行錯誤し、しんどい思いをすることで得られるものは少なかつたと、今になって感じます。イチロー選手が「できる限りの準備をして、良い結果が出るには限らない。だから野球は面白いですよ」と話したことがありますが、そんな哲学的な言い回しがごく自然に受け入れられるのも、大変な努力を払っていたファイターズの仲間たちをおぼえているからです。勝つために突き詰める、時間と労力をかけるという実体験は、分野を問わず勝者へのリスペクトにつながります。失敗や敗因に対する冷静な目も培ってくれるのではないのでしょうか。

ライバルを倒すための一生懸命は当たり前で、その見返りを求めすぎているのではない。自己満足ではなく、他者がどう自分を評価しているのか。どうしても勝つたい相手がいるのなら、その敵の実力をいかに的確につかむのか。イチロー選手をはじめとするトップアスリートたちも人間ですから多少の気持ちの波はありますし、ファンやメディア関係者とは別次元の角度から物事を見ていたりすることもしばしばです。こちらの問いかけに予期しない反応があっても決して動じないけいなし、なぜそうなったかを自省しながら振り返らなければならぬ。相手をより深く、詳しく知りたいならば、まず周囲の選手たちをよく観察し、本命となる対象の相対的な立ち位置、客観的状況から理解していくことも大事になります。そうしたスポーツ記者としての心得は、どれもファイターズの先輩、後輩の

たんユニホームを着れば馴れ合いの雰囲気は一切なかった。むしろメジャーリーグ時代の後半以降は「それだけ長く見ているのにそんなもんですか」的な空気が漂っていて、こちらも気を抜くときがありませんでした。彼に質問をぶつける際の、あの独特の緊張感、自分のファイターズ現役時代にコーチ陣やチームメイトから「お前、ホンマにそれでええのか？」と問いかけられたときの空気が似ていた気がします。

イチロー選手は取材者にとって特異な存在でした。プレーのクオリティは言うまでもなく、目的意識の高さと克己心の強さが並のプロ野球選手とは全然違う。たとえばプロ1年目の1992年7月、一軍に初昇格して日米通算の1本目のヒットを打った試合後、彼がひとり遠征先の屋台でラーメンを食べながら、「こんなことしている場合じゃない。今ももっとやらなきゃいけないことがある」と悔しがったことがあります。普通なら高校出ルーキーが一軍に呼ばれること、プロ初安打をそんなに早く記録することはまれで、大変めでたいことなのですが、彼は「3年後には同じ年の大卒が入ってくる。そのとき自分は彼らに勝てる技術をも身につけていないといけない。一軍でゲームに出たり、出なかったりではそのための時間が足りない」と考えていたのです。

方々が粛々と受け継いできたスタイルと重なります。

### 強大な壁に挑むことを意気に感じて

学生時代の自分は、たいした選手ではありませんでした。今の現役の皆さんに誇れるものなんて何もありません。1年生の夏合宿でちょっと調子が良くて、秋のリーグ戦1試合目に先発で使ってもらえたのですが、2戦目が終わったあたりから腰を痛めてレギュラー定着のチャンスが失いました。2年生ではケガばかり。太ももを肉離れしたり、盲腸をこじらせたのでろくに練習もできなかつた。後で聞いた話ですが、コーチ陣や上級生のなかには「あんなダルいやつ辞めさせろ」との声もあつたそうです。3年生になり、再び試合に出してもらえるようになってからも故障がちで、周りからすればきつともどかしい選手だったでしょう。4年生になってからも同期や後輩から「しつかりせよ」と突き上げられることの方が多かった。

そんな自分が現役の皆さんに伝えたいのは、いまあなたたちそれぞれの目前にある課題やスクリーンラインを挟んでならみ合う相手選手、チーム内でのライバルたちは、卒業後の人生ではそうそう出会えない強敵だということでしょうか。少なくとも自分の場合はそうでした。イチロー選手の取材を続けるうえで、ファイターズの現役時代と同様に「こいつすごいな」と思わされた競争相手はほとんどいません。将来どの仕事に就くにせよ、真剣にやれば必ずしんどいことにぶち当たります。でも、そのしんどさと真正面から向き合った経験は、いつか何かのちからで生きてくる。強大な相手、大きな壁に挑むことを意気に感じ、思い残すことなくぶつかってほしいと思います。